

とするのに、母は狂人のやうに反抗しつづけ、あばれまはるのだと、文子が夜遅く病院から歸つての話であつた。それこそ、死力とでも云ふのであらうか。あとで考へれば、その時母は、既に精神に異状を呈しながら、刻刻に襲ひせまる死に對して、根かぎりの抵抗を本能的にこころみたまものやうであつた。それから一晝夜あまり母は昏睡状態のまま、入院後十二日目の深更一時すぎ、最後の痰が咽喉にござと鳴つて落ちるひまもなく息絶えた。

「今死んでは、死んでも死にきれない。」

いつかかう母が云つた時の、恨みをふくむ眼付、歪んだ口つき、現世に思ひを残す凄惨い程の醜い相を、その蒼ざめた死顔は遺憾なくもどめてゐた。

三吉は死顔の白布を、二度ととる氣はしなかつた。

「うう、……うう、……」

佛前で不意にうめくやうな聲がしたのに、三吉は何事かと振かへつて見た。

「ううーひ、……ううーひ、……」

叔父がすつかり背をまろくして額づき、その顔を両手で蔽ひながら肩をふるはし嗚咽してゐるのであつた。

この叔父は、三吉の母の弟で、今は大島町に借金だらけのぼろ工場を経営してゐるのだが、震災前には大井の方に大きな釘工場を持ち、本所の元町に堂堂たる店舗をもつて、萬の金を動かしてゐるのであつた。

兩國橋畔、大山巖書の表忠碑の建つ僅な三角地に、叔父夫婦に伴と、この三人は避難して、猛火を前に一夜中生死の境におびえ、辛うじてあの震災の犠牲をまぬがれたのであつた。叔父の頭の毛は、その夜を境にして、今までの胡麻鹽が眞白になつてしまつた。

それ以來めつきり氣も弱くなつてゐた。壯年時代には上海の方へまでも渡り、雄圖に燃えたつたこともあるのに、それも云はば昔の夢で、災後の金融はまったく逼塞し、剩へ持病の喘息には惱まされるのであつた。そこへ忽然と、ただ一人の姉の死であつた。今更のやうに老病苦死の感にとらはれ、死者を悼み、我身の悲運を嘆くのも當然の事であつた。

半夜の通夜をすまし、叔父は歸宅すると云つて、佛前に麝香をし、そこへちつと額づくところまで、三吉は隣室から見てゐたのであつた。さうして、ちよつと顔をそらしてゐると、あの嗚咽であつた。

誰も誰も、三吉の母の柩に向つて、それほど自然な率直な悲嘆を表白したものはないのであつた。それはちやうど、姉に叱られて、あやまり泣く弟の姿のやうに、單純で、子供らしく、それだけに悲しみの實感が三吉に來た。顔にあててゐた手は、いつの間にか白髪頭をしつかりと抱へ、經机の下にもぐ

りこみさうな恰好で、疊にへたばり咽び泣くのであつた。
 徐徐に嗚咽もをさまり、涙をかんでそこにゐなほると、叔父はうしろへ向いて眼鏡の眼にあたりを捜しもとめるのであつた。

「五作はゐないか！ どこへ行つた、五作！」

「二階です。」

四郎は腰輕に立つて、梯子段の下から呼びあげた。

「五作、叔父さんが呼んでるよ。」

呼ばれて五作は降りて来たが、怪訝さうに敷居際に中腰できよろきよろするところへ、叔父はいつにない烈しさで云つた。

「お前のお母さんが、どうしてこんなに早く死ぬやうになつたか、お前に解つてゐるのか？」

三吉にも意外であつた。が、叔父は工場に出入するもの噂話で、五作達同志の動靜を知つてゐたのであつた。

毎年正月元旦には、未明に起き、家人とは一切言葉をまじへず、水風呂に沐浴して禮服を着し、先づ二重櫓前に聖壽萬歳をことほぎ、次いで愛宕山上に初日の出を拜し、それから家に歸つて初めて家人と年賀の辭をかはすと云ふ叔父であつた。

五作と思想上相容れないのは當然であると同時に、あまりにも呆氣なく、然も無限の執着をこの世に残して去つた姉の死を見て、五作を責めずにもられない心理も首肯されるのであつた。

「お前のお母さんの死を早めたのは、お前のせりだとは思はないのか？」

何と云はれても、五作は頑固に口を緘じたままであつた。

「ここへ来て、お母さんにあやまるんだ。」

氣をいらつて叔父はどもりながら云ふと、自分はおとずさつて、佛前に席をあけてやつた。ゆらぐ蠟燭の灯に、叔父の頬に流れる涙の痕があはく光るのを三吉は見た。

「この棺の中には」と、叔父は、そこに臺をして横たはる柩を指さし、「お前のことばかり心配して、死にきれずに死んで行つたお母さんが、……」

あとは云へずに、叔父は片手に顔を蔽ふのであつた。

「榮子、お前もよくない。そばについてゐて、どうして五作を放任しておいた！」

「はい。」

榮子は日頃叔父に好感情を持たないのであつたが、さすがに母の弟として、この場合すなほに責をうけるのであつた。

五作は前に進んで、手をつき、深く頭を垂れさせた。大粒の涙が、ぼたりぼたりと落ちるのが光つて

見えた。

佛前を離れると、五作は眼をしばたたきながら、急いで二階へあがつて行つた。

三吉が行つて見ると、立つたままで五作は床柱によりかかり、それに頭をこつんこつんぶつつけ、齒をくひしぱり、涙一杯の凄惨な眼で天井を睨んで、野獸の底うなりのやうな聲を、間断なく出してゐた。

母の死を悲しむ心と、主義に殉ずる心と、この二つの心の葛藤を、三吉は見るやうな氣がした。

「いいよ、五作、俺が解つてゐる。」

弟の肩に手をかけて、三吉は、慰めやうもないとは知りつつ、そんなことを云ふのであつた。

母

——三部作「父」「母」「子」等の一つ——

1

黒黒と病室の玻璃窓を蔽ふ葉櫻の葉の隙間に、星が一つ見えた。何百光年、何千光年、或は何萬光年か、はるかはるか遠い遠い、小さな光る星だ。

葉が揺れて、その星の隠れるのを、三吉は硝子に鼻先をくつつけて熱心に捜して見た。あんな星にも、生物の世界があるかも知れないなあ。なんにもならない空想を、わざと三吉は起して見た。

さうしてゐる間だけでも、せめて、臨終に迫る母の苦しげな喘息をともしなふ呼吸を、彼は耳にしたくないと考へた。引く息は短く、吐く息は長く、——六十何年間の生活にまつたく疲れきつた揚句の肉體が、昏睡状態に陥りつつ、辛うじて、單に機械的に行つてゐる呼吸だ。

だらしなく開かれた口に、酸素吸入の硝子器が、看護婦の手で支へられてゐる。時時、咽喉に痰がか

らまつて呼吸は絶える。やがて最後の痰は、ごろごろと異様の音をたてた。
午前一時を過ぎてゐる。誠意のなささうな、芋蟲眉毛の、頬の皮膚のたるんだ、顔に何等表情のない
當直醫師は、静脈のふとい筋ばつた手で義務的に病人のブルスをおさへてゐる、看護婦は病者に對して
と云ふよりは、ベッドの周圍に立ち並ぶ生存者のためにらしく、さも熱心さうに、わざと慌てても見え
るくらゐに、それはそはと二の腕に注射を行ふ。

が、まるつきり意識を失つて、一晝夜ぶつとほしに昏睡をつづけてゐる人間が、斷末魔にそれほどの
怖ろしい醜い生物的苦悶をあげようとは、娘や息子たちの誰一人として豫期するところではなかつた。
見る見る額の髪のはえ際に滲みでる油汗は、今こそその全身に襲ひかかる死魔に反抗して無意識のうち
に母が極度の動物的闘争を行つてゐる證據だ。つぶつてゐた二つの眼は、くわつと見ひらかれ、瞳は上
へ釣りあがつた。鉛色だつた顔には、リトマス試験紙が變色するやうに生色がみなぎつた。同時に顔面
筋の痙攣は、その容貌を人間的なものより極端に獸的な醜惡物に換へてしまつた。それが母の終焉だつ
た。そのままの容貌で、一時に血の氣がひくと、ふたたび鈍く光る鉛色の死面となつた。

えい子、三吉、四郎、五作、宏、誰一人すすり泣くものもなかつた。彼等は救はれたやうに、ほつと
吐息を洩らした。

どうせ死ぬものなら、早く死んだ方がいい！——少くともその場合、誰しもさう願つてゐたやうだ。

看護婦は氣合をかけて、ぐツ、ぐツ、と、死人の黄いろい胸に飛び出でゐる肋骨も折れさうに、両手
の壓迫で人工呼吸を施した。

しなびきつた眞黒の乳首が、そのたびに震動した。殊に左の乳首は、食ひちぎられて、芋蔓にさがる
芋の子のやうに、ぶるツ、ぶるツ、と、小刻みに揺れた。

長女のえい子は四十七歳だ。長男の一藏は三十七歳で死んで、その子の宏は中學一年生だ。次男の二
郎は十歳で死んだ。三十數年前のことだ。三男の三吉は四十歳になんなんとしてゐる。四男の四郎は三
十二歳、五男の五作は徴兵検査を終つた。みんなみんなあの乳房に縋つて育つたのだ。誰があの乳首を
食ひちぎつたのか！

看護婦は執拗に人工呼吸法を繼續してゐる。

そんなことをしたつて、何の役にたつもんか！

形式的の施術とは知つてゐても、三吉はそこで母が息を吹きかへしてもしたら困ると思つた。死體を
凌辱する科學の進歩を呪ひたくもなつた。いらいらして、瘤癢玉が破裂しさうだつた。

消毒された死體は、すぐに病院の庭の一隅に解剖室と並んでゐるバラツク建の屍室にうつされた。

三吉はひどく力が抜けきつて、變に身體がだるかつた。死人の頭のところ、堅い木の腰掛にかけて
壁に背をもたせてゐると、いつとなく眠りに誘はれた。眠るまいとしてぐつと眼を見開くと、暗い室内

に瞬く蠟燭の焰は催眠術的效果を齎し、加へて線香の匂ひは魔睡の魅惑を忍びやかに與へるのだつた。眼をつぶるでもなく、と云つて全く覺醒してゐるでもなく、夢うつつの境に、彼は床に就いて寝てゐる母の顔を見た。何か物云ひたさうに、母の口が動いたかと思つた瞬間に、その口からどくどくと血が溢れでた。三吉は背中にも氷片でも落されたやうに身震ひがして、意識をとり戻した。

死人の口端に、赤黒い汚物がどろりとこびりついて流れだしてゐた。別室から脱脂綿を持つて来て、彼はいやいやながらそれを、割箸でぐいぐい母の口腔に押しこんでやつた。箸は折れた。かはりに蠟燭の尻でやつた。

死人から、彼は一刻も早く解放されることを望んだ。

日取の關係で、葬式は三日後になつた。そのために、死體に防腐液を注入しなければならなかつた。五月末の蒸暑い日の午後、しめきつた解剖室で、三吉はフォルマリン液にむせて咳きこむのをハンケチでおさへ、ひりひり痛む眼に涙をためて手術に立會つた。

石造の解剖臺に、母の死體は一片の白布を局所にのせたきりで、大の字になつてゐる。股の内側が切開された。左が先に、それから右。その動脈に玻璃管をつきさして、ポンプ仕掛でフォルマリン液を注入するのだ。大壺に盛られた赤色の液體は見る間に減つて行く。すると、無氣味に黄いろい母の死體

は、水死人のやうに四肢がぶくぶく膨脹して行つた。あんなに瘦せてゐた體は丸太のやうにふとくなり、腹部の皺もなくなつて、腸満か孕婦のやうにふくれあがつた。

悲惨をとほり越して、寧ろ滑稽な姿態だつた。

「これで二千グラムです。これだけ注入すれば十分です。」

やつとこ鉞を使つて切開部を縫合してゐたのを、醫師は手をやめ、ちらと眼をあげて、マスクのなかでもごもごと云つた。その眼が、なぜともなく人を嘲笑してゐるやうに、三吉には思はれた。彼は軽いうなづきを與へたきりだつた。

そのうち、醫師の手先が敏活に動いてゐる場所のすぐ前の白布が、下から赤色の液體ににじみあがつて來るのを發見した。醫師は看護婦に横眼をくれて、すばやく瞬きしながら顎で命じた。

また脱脂綿だ。朝方三吉が死者の口腔にしたと同様手段が、異なる場所に看護婦の手によつて行はれた。

三吉は顔をそむけて、何と云ふことなしに窓の方へ行つた。そこは裏手で、窓の外はすぐ堀だつた。

一つの窓が、三寸ほどあいてゐた。その隙間の上方に、コバルト色の空が細長く見えた。息苦しさから少しなりと救はれたい氣持で、彼はそこへ行つて見た。四つの眼が、内部をうかがつてゐるではないか。然も若い女だつた。窓框の上に、前後に重なりあつて。

三吉に發見されると、二人とも口を抑へ、頸を縮め、忍び笑ひしながら逃げて行つた。

ふん！ 貴様達も、いつかはあんなさまになるんだぜ！
むかむかしながら、三吉は肚のなかで罵った。

「お母さんはたしかに臍くりを持つてゐる。」
日頃からの四郎の言草だった。

まさかと思ひながら、三吉もさもしい料簡を起すやうになつた。父の歿後、一家の主権者は彼だった。葬式が済んで、或日、三吉は出かけて行つて、姉のえい子に母の遺物整理をはかつた。

四郎はにやり笑つた。兄貴の奴、慾を出しやがつたな！ 四郎の意地悪い考へは、すぐに敏感な三吉に反射せずにはゐなかつた。

「箆の棹を抜いて、残らず縁側へ持ちだすんだ！」

兄は權柄づくに命令した。

「今日は四郎もゐるから、ちやうどいい。ゐない留守にやつたりすると、歸つてから嫌味を云はれないとも限らないからね。」

姉も冗談まじりに、四郎に皮肉を云つた。

「嫌味なんか云ひやしないさ。」

四郎は怒りもせず、あつさりと答へた。

が、表面は平靜を装つても、内心誰も彼も眞剣だった。箆の棹、櫃、文庫、――汗を流してあらゆるものを縁側に運んだ。古いぼろきれや反古類の塵と黴のにはひが、室内に充滿した。姉はマスクをかけた。三吉は手拭で鼻と口に猿轡をした。四郎は時時勝手へ行つて含嗽した。

結局何物も發見されなかつた。三人ともがっかりした。部屋ぢゆうに取散らかした雑品雑物を、誰も先にたつてもとに收めようとはしなかつた。

「たしかにある筈だがなあ。」

四郎は正直に慾心を現はすだけ、まだしも人のいいところがあつた。

「何があるもんかい。最初から解つてみたんだ。お前がうるさく云ふから、氣が済むやうに搜してやつたまでの事よ。」

にがにがしく吐きだすやうに三吉は云つた。が、彼の失望は四郎以上だった。

「お母さんが草葉の蔭でわらつてゐるよ。」

また皮肉を云ふのは姉だった。

五作が二階から降りて來ると、亂脈なその場の光景に、蛸のやうな眼をして頓狂に口を尖らしながら

大仰に眺めわたした。と思ふと彼は、いきなり箱のなかから大きなきれを引出して、ひろげた。

「何だい、これは？」

「何でもない、旗だわ。」

えい子や三吉などが、昔呼び馴らしたオランダ語であつた。白の呉絹服地に赤丸に一を染めた汽船用の旗だ。ひろげると巖三疊にあまつた。

「うちの蒸汽船の旗だつたのよ。三吉だけだね、知つてゐるのは。汽笛が變に尻あがりには鳴るんで、それを聞くとどこにゐても、そら、松前丸が入港したつて、町ぢゆう誰にでも解つたものよ。」

勢ひこんで自慢さうに姉がいくら云つたつて、三十五年も六年もの昔のことではないか。

三吉は縁側にあぐらをかいて、苜をふかしながら人家の間に聳える樺の大樹の背後にツェペリン型の白雲が紺碧の空に浮んでゐるのを眺めてゐた。姉の方には振りかへらうともしなかつた。が、眼鏡をかけた姉の、弟の腹中を見抜いた皮肉なきつい眼を、彼は頭のうしろで感じてゐた。

3

家、屋敷、別宅、ことごとく人手に渡つても、一戸前の土蔵だけが、川添の町家並のなかに残された。城下から一里も奥の山麓の畑地にひつこんでから、正月、祭禮、法事等の場合、その川添の土蔵へよ

く三吉は母に連れられて行つた。

母と女中達が品物の出し入れをしてゐる間、大概三吉は二階の金網窓のところへ和本の三國誌なんかを持出して、挿繪を眺めたり、讀めもしない變體假名まじりの文章を、聲たててえろえろとごまかし讀みをしたりして獨りで遊んでゐたものだ。

或時のこと、その窓先へ母が持つて来てひろげて見せたのが、松前丸で使つた呉絹服連の旗だつた。

それ以來三吉は見もしなかつたし、思ひだしもしなかつた。三十年は経過してゐる。さうして最後に母の死後、母の遺物のなかから發見されたのだ。

母にとつては、終生怨恨のつきない旗だつたのだ。

三艘の蒸汽船が二艘になり、二艘が一艘になつてしまつた。松前丸がそれだ。或年の初冬、鮭を満載して彼女は母港を發したが、十數日後東京から船員の一人によつて齎らされたのが、その旗だつたのだ。往航に、金華山沖で、時化をくつたのだ。

船員は母の前に物語つた。

「わつしらはみんなもう、觀念して、運を天にまかせやしたよ。波に揉まれる鹽どころの騒ぎぢやねえんです。木の葉だなんて、そんなもんでもねえんで、なんてえますかね、まあ、何でもええでさあ、今度ばかりは命はねえもんと覺悟をきめやした。ところが、まつたく大將は豪義なもんでやす。船長だつ

て及ぶもんですかえ。マストへしつかり身體を縛りつけやしてね、——なんでえ、野郎共、これつばかりの時化くらつて、眼をまはす奴があるか！ 酒の肴にや持つて來いの時化ぢやねえか！ みんな飲め、飲め！ てんで、大將自身徳利からごくりごくり呷るつてえ元氣でさあ。もつともあれや、わつしらに屬みをつけてやらうつてえ大將の肚だこたあ承知してやしたが、今でも眼に見えるのは、デツキを越えてぶつつけるでつかい波のしぶきを、づぶ濡れに浴びながら、がらがら笑つてた大將ののんきさうな顔でさあ。」

一日一晚松前丸は颶風に翻弄され、辛うじて難船をまぬかれることが出來た。さうして隅田川にたどりついた。が、積荷の鮭は海水の侵入を受けて、賣物にはなりさうもない。そこで「大將」は一策を案出した。比較的海水に侵されない下積の鮭を上積に持つて來たのだ。然も「大將」は、船ぐるみ賣つてしまつたのだ。

その経緯を報告するに及んで、大膽粗暴の船員もさすがに母の前で汗を流した。船ぐるみ賣拂つて得た相當莫大の金を「大將」は船長以下全部の船員に大盤振舞をして費ひはたしてしまつたのだ。

「何しろ金華山沖で、難破してみんな死んだやうな氣になつてゐたもんで、……」

「いつそ沈没して、死んでしまつたらよかつたのに！」

母の鋭い聲に、頭を掻きながらにやにや笑つてゐた船員は、一氣に頸をちぢめて參つた。

「これでもう、一艘も蒸気船がなくなつた！」

名残の旗を掴んで母は泣いた。

これは三吉には又聞の話だつた。

母は幼少時に、別家から本家に養女にはひつたひとだ。父は後年他家から養子に來た。母はほとんど家附の娘の格だつた。が、あまりに剛毅果斷にすぎる父の度度の失敗によつて、さすがの名家も轉落する石の如く没落への一路を辿る有様を、舊婦人道德に養はれた母は黙つて見てゐるより外はなかつた。

4

三吉が六歳の秋だつた。人並に小机を背にくくりつけ、紐つきの草履で、母や女中にかはるがはる手をひかれながら、城下から一里奥、山麓の新住地への路を辿つた。

そこはまつたく一軒家だつた。その家のことを、「山の家」と呼んだ。李、林檎、梨、杏子、巴旦杏、等の果樹園があつた。林の奥で山鳩が啼いた。小雀、四十雀、綿帽子、鶉、紅鵝、あらゆる小鳥が、高い榛の木の上を渡つたり、グスベリーの藪に囀つたりした。雫はよく栗の木にとまつた。

麥畑を越えて小高い丘にのぼれば、城下の町は一瞬のうちにあつた。三層の天守閣は老松のなかに白

い粹な姿を見せた。その老松の聳えるあたりこそ、三吉達の住んでゐた邸宅のあるところだ。晴天の日には津輕海峡の彼方に津輕富士が鮮明に見えた。嘗ては「大將」を乗せた蒸気船が、内地の方から特異の汽笛を鳴らして入港して来た海だ。

海をわたり町を越えて、「山の家」まで汽笛が聞えて来ると、母は時に三吉を連れて、麥畑の先の小高い丘へ登つた。えい子、一藏、二郎、三人は城址に構へた小學校へ行つてゐて、家に残るは三吉だけだつた。

もう決して「うちの蒸気船」は港へはひつて来ないのだ。白神岬をかはして入港する蒸気船は、みんなよその持船だ。

三艘の蒸気船はみんななくなつた。土藏も一戸前しか残らない。町の家、屋敷、別宅、ことごとく他人の有に歸した。

が、三十歳にして若き母は、既に四人の子を持つてゐた。

母はぢきに、遙かに聞えて来る蒸気船の汽笛を耳にしても、丘の方へ誘ひだされることはなくなつた。えい子十四歳、一藏は十二歳、二郎は九歳、三吉は六歳だつた。母は一樣に子を愛する氣持を備へてゐるが、なかでも二郎を特に愛した。二郎は柔順で、そのくせ時時剽軽なことをやつて見せるので、みんなに好かれた。學校の出来はさうよくもなかつた。習字だけは、とびぬけてゐた。父の荒い血が子に

傳はることを極度に怖れてゐる母は、そんな傾向が二郎には全然見えないし、柔順で、女性的で、剽軽で、手習ひを好む、かう云ふ性質の彼を特愛したのは最も當然のことだつた。

5

城下の町より「山」の方へは、一足先に冬が林を鳴らしてやつて来た。林の騒音も聞えなくなつた時には、家はすつかり雪にうづまつてゐた。窓先の雪を掘りあげて、光線を導かなければならなかつた。深い雪の斷截面には黄昏のやうな蒼白い光線が神秘的にまつはりついて、それをまた窓硝子をとほして家のなかから見てゐる子供達の顔面に童話的色彩を反映させた。

表の通路に雪を深く掘つて、一藏は陷穽をつくつた。細い竹を從横にわたし、それに藁を敷いて、更に雪をかぶせ、足駄の齒跡を巧みにつけた。

容易に誰もかからなかつた。子供等は家のなかにはひつて遊んでゐるうちに、忘れてしまつた。日暮ちかく、表で叫聲がした。食べかけの蜜柑を握つたまま、一藏は飛びだした。二郎も三吉も跡につづいた。

が、二郎と三吉が表へ行つて見た時には、母のために一藏が雪のなかに投げ倒されて、さかんに折檻されてゐるところだつた。母の折檻を見たことのない二郎と三吉は、驚いて、ぼんやりした。そのうち

に、身内ががたがた震へて来た。氣の弱い二郎は、すぐにべそを掻きだした。三吉もえんえん泣きだした。

母はやうやく折檻をやめて、今までの鬼のやうな顔を急に柔げながら、二郎と三吉のところへ来た。

「寒い、寒い！　うちへはひるんだよ！」

二郎は頑強にいやいやをした。母に噛じりついて、大聲に喚き泣いた。

「あんちゃん連れて来て！　あんちゃん連れて来て！」

仕方なしに母は一藏を起して、着物の雪を拂つてやつた。

いつのまにか二郎はにこにこして、兄のそばへ寄つて来てゐた。さうして、兄の袖をひつばつて、母の落ちこんだ陥穽の縁へ連れて行つた。

「一、二の、三！」

號令をかけて二郎は飛びこんだ。

「一、二の、三！」

一藏も飛びこんだ。

二人は云ひあはしたやうに、げらげら笑ひながら、庭を下駄で踏みつけた。

「しゃうのないもんだ！　それ、雪女が来る！」

厳しくおどかさされて、二人は頓狂に喚きながら、犬のやうに雪まみれになつて匍ひあがると、母のあとを追つて縋りついた。母は自分の指先を赤く凍えさせながら、子供等の雪を丹念に拂ひ落してやつた。

6

母としての不幸は、「山の家」ではじめて迎へた正月の松の内にその端を發した。

二郎が感冒で寝ついたので。

若しも城下の家屋敷を人手に渡さずに濟んだら、寒い寒い「山の家」に移り住むこともなく、二郎も病氣にかからなかつたらうにと、これは母の愚痴だつた。

祖母は他力本願の信心深い門徒宗だつた。むしろ狂信者だつた。松の内に病みついて七月初旬に永眠するまで、半年の間に、まだ十歳の少年をして來世を信ぜしめ、極樂往生を願はしめたのは、彌陀の教を説くに倦むことを知らない祖母の方だつた。

三月になれば梅が咲き、四月はまつたく春だ。春になつたらと云ふ唯一の希望は、少しの衰へも見せない病勢によつて裏ざられた。

「二郎、何か食べたいものはないか？」

折折母が病床に訪れてそんなことを云ふと、祖母はその度に二郎の答へをひきとるのだ。

「婆婆のものは、もう何れにせよ、阿彌陀さんのおそばへ行けば、百味の飲食があるんだもの。さうだね、二郎？」

眼ばかり大きく、瘦せかけて蒼ざめた顔に微笑をうかべ、二郎は祖母にうなづいて見せるのだ。

「泣いたりしては、死んだ佛が迷ふよ。折角安心立命して成佛したのに、親が泣いたんでは、靈が迷つて浮ばれなくなる。」

二郎の臨終に泣き入る母を叱りつけたのも、祖母だった。

母に見れば、子供らしくもなく極樂へ行くことを喜んで、苦しくも何ともないと笑顔のままに死んで行つた二郎を、憎らしくも恨めしくも思つた。せめては一言でも最後に母を呼んでもらひたかつた。

「女は業も深ければ罪も深いと云ふのは、そのことだよ。」

祖母は諭すと云ふよりは、嚴重に戒めると云ふやうな口吻だった。

「善きにつけ悪しきにつけ、悲しみにつけ喜びにつけ、ただ一心一向に、如來様にお縫り申せばいいのに、我執我慾ばかりが強いんで、修羅の妄執に悩まされるんだよ。いつかお前、お説教で聴かなかつたかえ？ 天竺の話だよ、お釋迦様が、或日の暮方菩提樹の下で休んでゐらつしやると、一人の婆さんがやつて来た。たつた一人の伴をどうしてあの世へ引取つたのかつて、その婆さんがお釋迦様に無理無難なことを云つて、くつてかかる。どうしてももう一度、伴を婆婆へ歸らしてくれと云つてきかないんだ

よ。そこでお釋迦様は、さうか、よしよし、それほどの望みならば、もう一度婆婆へ歸らしてやらう、だがそれには、入用のものがあると、かうおつしやつた。婆さんは喜んで、伴さへもう一度婆婆によみがへつて来るものなら、どんな御入用のものでも差上げますと請合つたものだね。それでは蠟燭を持つて町へ行つて、どこの家でもいい、ただし今までに一度も葬式を出したことはない家から、灯をもらつてその蠟燭につけて來なさい、さうしたら望みどほり伴を婆婆へ生きかへらしてやらう。それをきくと婆さんはほくほくして町へ出かけて行つたんだけど、間もなく泣顔をしてしをしを歸つて來た。どうした、蠟燭の灯は？ かうお釋迦様がおつしやると、婆さんは、町ちゆう一軒のこらずまはつても、今までに葬式を出さないと云ふ家は一軒もないので灯がもらへなかつたと云ふんだ。そこでお釋迦様はお諭しになるんだよ。生あると必ず死あり、悲しみはお前の家にばかりあるのではないぞよと、……」

7

一藏は十六歳で、或る大海港の中學校にはひるため、海上六時間の船旅についた。

一藏をのせた汽船の、出港を報ずる汽笛が、港の方から聞えて來た。

母と三吉は「山の家」に留守をしてゐた。汽笛の音をききつけると、母は足駄をつきかけて駈けだん

た。三吉はあとを追つて泣いた。

「早く來な！ 蒸気船が出るよ、……あんちやんの乗つた蒸気船が！」

ところどころに麥の青芽の見える残雪の小丘を、母と三吉は、足駄の齒にはさまる雪でよろめきながら登つて行つた。

三吉は轉んだ。母は知らずに先へ行つた。三吉は泣きだした。

「ひと、手間どらせて！」

母は眼に角だてて戻つて來た。その拍子に母も雪に兩膝をついた。

「蒸気船が行つてしまつたら、どうする！」

母は起きあがると、いらいらしながら邪慳に三吉の細腕を握みあげて、ひきたてた。

丘に登りきつた。港の投錨地點を遮る三層の天守閣や附近の老松の、その蔭から、白い汽船がちやうど姿を見せて、沖へと向うところだつた。

黒煙を吐く黒い煙突の横手から、白い煙が微かになびいた。消えた。汽笛が聞えて來た。港に別れを告げる汽笛だつた。

第一に現世から、その一人の子を奪ひ去られた母は、第二に、もう一人の子が故郷の巢を立つて行くのを見送ることになつた。

さうして、第三に、第四に、……

第三には、長女のえい子だつた。

その當時、小學校教員の檢定試験に合格して、母校の教職についてゐたえい子は、都會の方でやうやく擡頭して來た女子高等教育の聲に情熱を煽りたてられた。

ずっと北の方の、日本海に面する練場だけは、まだ手放さないでゐた頃のことだ、えい子をして女子最高學府に學ばしめるだけの資力の餘裕のあることを父は計算して許すことになつた。

えい子が出發すると云ふ日、その時は三吉は既に高等二年生で、姉の東京行を自慢に思ひながら、袴をつけて、港まで見送りに行く一行とはしやいでゐた。

奥まつた座敷から、咽喉もひき裂けるやうな泣き叫び聲が、きこえて來た。三吉達は眼をまるくして顔を見あつた。泣き聲はほそく、絶え絶えにつづいて、しまひには何時やむとも知れない嗚咽のもつれあひになつた。

出發の時間がせまるので、父がむづかしい顔で、奥座敷へ行くと、やがて眼をあかく泣きはらしたえい子を従へて來た。

みんなは玄關におりた。母の姿は見えなかつた。みんな出たあとへ、母は涙いつぱいの眼で玄關へ出て、えい子の後姿を見送つた。娘はえい子一人きりだ。世間へは出ることもなく、いつも日蔭でばかり

暮して、案じ煩つてゐる母にとつて、えい子はただひとり心だのみの娘だった。

人口一萬の城下の町に生たち、育ち、どこも他國を知らない母だった。母にとつては全然未知の世界へ、子供等はみんな行つてしまふのだ。

母はひとり留守居をしてゐた。

港からは出港を報ずる汽笛が聞えて来た。

ところどころに麥の青芽の見える残雪の小丘を、母は足駄の齒にはさまる雪でよろめきながら登つて行つた。

足駄の雪圍子で倒れる拍子に、母はべしやんこに雪泥へ坐つてしまつた。起きあがる力もないやうにぐつたりして、肩で息をついた。

勇氣を起して、丘に登りきつた。港の投錨地點を遮る三層の天守閣や附近の考松の、その蔭から、白い汽船がちやうと姿を見せて、沖へと向ふところだった。

黒煙を吐く黒い煙突の横手から、白い煙が微かになびいた。消えた。汽笛が聞えて来た。港に別れを告げる汽笛だった。

それから三年後、三吉が、兄の一藏の行つた海港よりもつと北の寒い海港へ、やはり中學校へはいるため旅立つた日は、二月中旬のことで、丘の上は吹雪だった。

一藏の時もえい子の時も、残雪の間に麥の青芽がのびてゐた。三吉の時は、丘全體からかちな、きららのやうに光る堅雪に蔽はれて、軽い粉雪がその丘を風にあちこちと吹きよせられてゐた。

留守居の母は、出港の汽笛の鳴るのを心待ちにしてゐた。が、西北の風が山の方から東南の港の方へ吹きつけてゐることに気がつくつと、彼女は狂亂のやうに藥杵をつきかけ、吹雪の頭髮顔面に吹き荒ぶにもひるまず、丘へ一氣に駆けのぼつた。

幾層にも空に蔽ひかぶさる墨色灰色の斷雲は、海峡を壓してゐた。海は暗く、荒れ崩れる波の白い波頭さへも見られた。

こんな時化に！

汽船の出港は見合せられたんではないかと思つた瞬間、物凄く荒海に、海の色とも船の色とも見わけのつかないながら、黒煙を烈風にちぎられて沖へ沖へと進む汽船のあるのに、母は驚愕の視點を凝結させられた。

露國艦隊が、津輕海峡から日本海へかけて脅威をふるふ風評のもつばらな時だった。暗夜の海峡を、探照燈を縦横にはなつて威嚇しながら露艦數隻が通過したのを見たとき云ふものもあつた。名古屋丸は撃沈された。三日前、紀元節の日、はるかに股股と遠雷の如くに轟いたのは、全勝丸が砲撃された大砲の音だった。

日露の間には既に宣戦は布告されてゐた。彼がの國情に少しも通じない母にとつては、戦争はただただ不安な暴風襲來の感じだつた。その上、一家の没落的悲運に彼女は直面してゐるのだつた。今は三吉を自力で學業につかせる餘裕もなく、親戚をたよりにして旅立たせたのだ。汽船は進航してゐるやうにも見えなかつた。波に没して、全然姿を見せない瞬間もあつた。吹きつける雪に險を凍らせながら、母は呼吸をとめ、化石のやうに動かなかつた。

8

四郎で最後と思つてゐたのに、十年の餘を經過して五作が生れた。その時はもう、山の畑地も家も、北方の鯨場も、みんな人手に渡つてしまつてゐた。子供等を次次に巢立たした船路に、零落の重荷にやつれた惨めな姿で、母も旅立ちしなければならぬ時が來た。町一流の名家に愛娘として育てられた母は、今は流竄の人のごとくに故郷を去らなければならなかつた。やはり冬の海だつた。見送りの人人に親切な言葉をかけられるのも、苦痛と恥だつた。が、彼女は最後の自尊心を奮ひ起して、吹雪の甲板に笑顔でちつと立ちつくした。小學生の四郎は旅立ちを喜んで、甲板を駆けまはつた。乳飲兒の五作は母の胸に抱かれて眠つてゐた。母の嘆きを共にわかつものは、誰もゐないのだ。えい子、一藏、三吉、みんな成人した子供等は、他國で思ひ思ひの生活を

をしてゐるのだ。

汽船が沖に進むに従つて、老松の間に見える白壁の三層の天守閣は、だんだん小さくなつた。はては吹雪のなかに朦朧と姿を滅してしまつた。

爾來七年、北地に於ける艱難と流轉の生活に母は老衰して行つた。

9

秋になつて隣家の百日紅が垣根越に花を咲かすと、母ははじめてこの大森の家の陽射の明るい縁側近くに、長旅の身をおいた日のことを思ひだした。

はじめて見る百日紅の花に、母は子供らしい驚異の眼でしげしげと見いつた。

母の弟が經營してゐる製釘工場に、父が監督役として北海道から招かれたのは三年前だつた。四郎も小學校を終ると、職工見習ひとして働くことになつた。今では一人前の職工になりきつてゐた。母は北海道の方で、五作と孫の宏と三人、父からの仕送でほそぼそと暮してゐたのを、今度呼びよせられて來ることになつたのだ。

えい子も來た。彼女は目の母校に教鞭をとつてゐた。眼鏡の奥に光るきつい眼は、母の昔とそつくりだつた。五十歳を越した母の眼は、光澤がなく曇つてゐた。

一藏も来た。垢じみた洋服を着ても、彼は或る夕刊新聞の記者だつた。先妻に別れて、子供の安を母に預けたまま上京して、今は本郷に同じ新聞社の婦人記者と同棲してゐた。

三吉も来た。彼は姉の補助をうけ、自分でも夜學塾に教へに行つたり、翻譯をしたりしながら、或る文科大學に學んでゐた。

四郎は油にてかてか光る職工服で、顔にも手にも黒い油の跡をつけながら、原つばをへだてた工場からにこにここと、元氣よくやつて来た。

これでみんな、子供等は揃つたのだ。腰は曲りかけて、背は年年縮んで行くやうな小柄の母とくらべて、なんと子供等はみんな大木のやうに威勢よく成長したことだらう！

三十年間の忍苦も、やうやく今は報いられたのだ。母は泣いていいのか笑つていいのか、どうにも解らない不思議な混亂を感じて庭先に眼をそらした。視野にはひつたのは、秋晴れの空に、鮮かに咲く百日紅の群花だつた。

「なんて云ふ花かね？」

母は獨言のやうに呟いた。

「さるすべりと云ふのよ。」

えい子だつた。

「百日紅つて書くのよ。」

母は黙つてうなづいて見せた。

10

が、その百日紅は、母に新たな悲しい追憶をもたらすことになつた。

或年の秋、百日紅のさかり時だつた。庭先で母は陽を浴びながら張物をしてゐた。

工場の仕事着で、父が木の面のやうな堅い陰気な顔で木戸からはひつて来た。

「今、えい子から電話が来た。一藏がゆうべ死んだぞ！」

母は背をのぼすと、いきなりうしろから頭を打たれた子供のやうに、きよとんと眼口をあけ、手にしてゐたふのりだらけの赤い裏地を地面に落した。

東京行の支度を命じておいて、父は近くの小學校へ五作と宏を迎へに行つた。

誰一人身内のものは一藏の死目に會はなかつた。友達の家で夜更まで酒を飲んであばれまはつて、だしぬけに腦溢血でたふれたのだ。

一藏の家内は眼のふちを涙でくしゃくしゃにして、みんなを迎へた。えい子と三吉は既にゐた。親不孝者！

一藏に對する母の感情は、常にこの一語につきてゐた。一藏からすれば、幾萬の資産を蕩盡して長男たる彼に譲り渡すべき何物をも残さなかつた父に反感と憎惡を持ちながら、始終自暴自棄的遊逸の生活をつづけて來たのだ。母が貧困に陥つた時にも、一藏は當時北海道で小學校教員を勤めて俸給を得ながら、母の生活費の補助をほとんどしなかつた。

「一藏のやうな親不孝者にはなるんでないぞ。」

四郎、五作、宏に誠める母の言葉はこれだつた。

えい子は女子最高學府にまで學ぶことは出來た。が、一藏は、中學卒業後、農學校に進みたいことを父に懇願したに拘らず、父は許さなかつた。父に對する一藏の反感は一層つゝつた。ひいては母に對しても同じ感情が發生した。

三吉はえい子の補助と彼自身の多少の苦學によつて、文科大學を卒業し、某大書店の編輯部に勤務することが出来るやうになつた。のみならず、次に創作を雑誌に發表して、漸次世間的に名を知られるやうにもなつた。この弟に對しても、一藏は反感を持つた。四郎はもつとも逆境に育ち、小學校きりで職工になつた。一藏は四郎に同情し、この兄弟はいろいろの點で常に共鳴しあつた。

父はそれらのことごとくを理解しながら、いつも黙黙としてゐた。三吉には、父のその受難的な苦艱の心が、およそ解るやうな氣がした。

ところどころ擦りきれて、糸の出でゐる緒茶けた破れ疊に薄い蒲團を敷き、その上に寝かされた一藏の死骸の前に、父、母、えい子、三吉、四郎、五作、宏、一藏の案内、みんな言葉なく坐つてゐた。

死骸には色褪せた紋服がさかしまにかけられてゐた。胸はふくれあがつてゐた。深く深く息を吸ひ込んでゐる時の形だつた。顔色さへ黄いろくなかつたら、誰が、この頑健さうなふとつた顔の持主を、死人と思つたらう！

「親不孝者！」

顫へる聲で呟くやうに云ふと、母は兩袖に顔をうづめた。兩の肩は戰いた。

父は無暗と咳ばらひをして、平手で鼻先を何度もこすつた。

みんなが立つと、死人の顔に白布がかけられた。

一度支關に降りた母は、忘れ物をしたやうにあわててひきかへすと、死骸のそばにべつたり坐つた。顔から白布をとつた。彼女の老眼はすっかり涙に濡れてゐた。合掌瞑目して、口早に念佛をとなへながら、背をまるめて深くうなだれた。

三吉の巴里行の話を書いた時、母は自分の子供の事ではないやうな氣がした。

自分の子供が、いつか華やかな外遊の旅にどうかうなどと、彼女は考へても見たことはなかつたのだ。いよいよ事實となつて、三吉が出發の日、父、四郎、五作、一緒に東京驛まで見送りに出かけて行つた留守に、母は、今年もおなじやうに垣根越に咲いた隣家の百日紅を縁先でひとり寂しさに眺めてゐた。

思ひだすのは、三吉が十五歳の時、二月の荒海を小さな汽船で故郷から旅立つて行つた日のことだ。母は吹雪の丘に立つて、髪も袖も裾も風に煽られながら、遠くに去り行く船を見送つた。

十七年前のことである。

爾來別れ別れに暮して來たのを、此頃身近にゐられるやうになつたかと思ふと、想像もつかない外國行だ。去年は一藏に死なれ、今年三吉に遠くへ行かれてしまふ。家、屋敷、別宅、蒸汽船、鰯場、山の畑、山の家、ことごとくを失ひつゝした後に、子供までも次から次へ奪ひ去られる悲哀苦痛は、母の心をいたましく萎えさせた。

東京驛發車の時刻からおして、大森邊を通過するおよその時間を見はからひ、母は戶外に出て見た。田圃を越えて小高い彼方によこたわる線路を、その汽車かと思はれるのが、やつて來た。が、どの客車のどの窓も、みんな日蔽がおりてゐた。遠くではつきりは見えないまでも、せめて車窓からなりと顔を出して行つてくれるかと思つたのも、むなしいそらだのみだつた。

母が思ふ何分の一も、子供は母を思ひはしないのだ！
部屋隅に座蒲團を二枚敷いて、母は力なく横になつた。

二年後、三吉歸朝の日には、母は雜司ヶ谷のえい子のところへ來てとまつてゐた。三吉の歸宅は夜だつた。

「たつしやで戻つたね！」

母は薄暗い玄關先に腰をまげて息子を迎へた。

「ただいま！ お母さんもたつしやですわね。」

小學生時代に、家に歸れば何より先に、「行つて参りました」と、母の前に手をついて挨拶をした頃の三吉にくらべれば、言葉だけは世馴れてあたたかさうでも、どこか他人行儀で、態度の底に冷たさのあるのが感ぜられた。

「お母さん、こんな柔かい御飯しやうがないわ。三吉は少しはめの御飯が好きなのに！」

翌る朝だつた。えい子は茶碗をとりあげるや、わざと箸でさんさんに突きほじくつて、母にあてこすつた。

「折角おいしい御飯をたべさせようと思つたのに、病人のたべるやうな御飯、しやうがない！」

母はおどおどして、臺所へ立つて行つた。黙つて米をとぎはじめた。えい子は眼鏡の奥から意地の悪い鋭い眼で、母の後姿を睨みつけた。

「誰がたきなほして頂戴つて云つたのよ！」

振りかへりもしないで、母は猶更音をたてながら米をとぎつづけた。時時涙を睨るのもきこえた。

三吉はゐたたまらずに、茶漬を一杯たべて表へ出た。雑司ヶ谷の墓地をぐるぐるまはつた。

その當時、父はまた北海道へ行つてゐた。親戚の家の若い養嗣子が、歐洲大戦中船に手を出してすっかり失敗したその跡始末に行つてゐたのだ。大森の家には、四郎とその妻子達の一家族と、母と五作と宏達の一家族と、二つの家族が同じ家にゐて別居的生活をたててゐた。母が本當にのびのびと、心安く暮せる場所は、結局五作と宏のそばでしかなかつた。えい子は別家をして、戸主となり、弟の三吉を養子にしてしまつた。大學を卒業させ、世間にも名を出させ、洋行までさせた三吉を、父や母に分捕されまいとしての手段だ。小學校きりで三吉の面倒を見ることをなし得なかつた父母は、親とはいへどもそれに反抗するだけの強味を持たなかつた。四郎はこれも別家して、妻帯し、二人の子持になつてゐる。業はすがない日給取の職工だ。同じ大森の家に棲むならば、本家別家とは云つても親子同志のことで、同じ世帯暮しをするのが當然だつたが、さうすれば母の方が四郎達に食ひこまれるのを怖れて、家賃は

折半、炊事は各自、米鹽ごとごとく別勘定にしてゐるのだ。

うつかりしてゐると 米を持つて行かれる！

母は四郎の嫁を警戒しなければならなかつた。

ない時には、ちよつとぐらゐ融通してくれるのが當然だ。

四郎は襖一つ隔つた隣室で、聞えよがしにしばしば憤慨の語氣を洩らした。

日本へ歸つたその日から、三吉はかうした現實に直面しなければならなかつた。初夏の朝だ。静寂な墓地だ。墓と墓との間の掃き清められた路に、三吉はうなだれながら佇んだ。土の色はくつきりと明暗にわかれてゐた。蟻が列をなして働いてゐた。その土に落された影の部分は、リズムカルに動揺した。上を見れば大櫓の梢に、新鮮な若葉が微風にそよいでゐた。

ふと、向うの十字路を、小風呂敷を胸にかかへて、前ごごみにしよんぼりとうつむいて行く母の姿が見えた。三吉の前方を横ぎつて、行くのだ。思はず彼は駈けださうとした。母の姿は墓の蔭にかくれた。十字路の曲り角まで走つて行つて、三吉は、花屋や石屋の前の日蔭路を肩をすぼめて、だんだん小さくなつて行く母を見送つた。

子供のために置き去りにされる母のながい経験を、えい子もなめさせられる時が来た。三吉が別に家庭をもつ事になつたのだ。

おなじ境遇を経て、はじめて、えい子は母の方へ心を傾けて行くやうになつた。震災の打撃で叔父の工場が閉鎖されなければならなくなつたことも、母達が大森を去る原因の一つとはなつたが、ともかく、母、五作、宏、この三人は、えい子のところへ同居に来た。目白の母校近くに新たに家を借りて、彼等の新生活ははじめられた。四郎は別の釘工場へはひつた。彼等は妻子と蒲田に住むことになつた。

五作は白金の丘の或る學院の普通部を、近く卒業すべき時期に達してゐた。三吉の使ひふるしたデスクを縁先の障子際に据ゑ、薬のはみ出た椅子に座蒲團をのせて、六疊間の一隅、床の間より自分の勉強場をつくつた。

「普通部を卒業したら、月給取になつて、僕はお母さんと暮すつもりです。」

幼少時から母と艱難を共にして来た五作は、三吉に普通部卒業後の方針を問はれて、或時さう答へたほどだつたが、いよいよその時期になると、高等部の商科にはひりたいと云ひだした。北海道の父の方からも、三吉のところへ、五作勉強の件は然るべく頼むと云つて来た。希望どほりに高等部の商科へ彼

ははひることになつた。

床の間の書架には、にはかに赤い禁書が堆く層を増して行つた。毎夜のやうに、五人も六人も學生がやつて来て、遅くまで議論したり、笑を爆發させたり、激昂したりした。母は隣室に宏と床を並べて寝ても、眠れないままに彼等の談話に耳を傾けるのだが、少しも意味は分明しなかつた。けれども何か重大な事のやうに思はれた。然も荒唐しいものが、その事柄の内部にひそんでゐるやうに直覺されて、怖ろしく不安に襲はれることがあつた。

時にはえい子の母校に關することが、彼等の話題にのぼされた。そのなかで、「さいはう」と云ふ言葉だけが、はつきり母に解つた。女の學校に裁縫はつきものだ。それにしても、男の學生が、どうして女の學校のことや裁縫のことを話しあふのか、彼女には不可解だつた。

みんなが歸つたあとで、母は起きだして来た。五作のために床を敷いてやつてから、母はおどおどしながら訊いて見た。

「毎晩おそくまで、何の話をしてるのかね？」

五作は困惑して、棒立のままに母をぢつと見つめた。

「歴史の勉強をしてるんです。」

「女學校のことだの、裁縫のことだの、そんなことまで勉強になるのかね？」

五作は驚いて眼をまるくしたが、すぐに「細胞」——「裁縫」——気がついて朗かに笑った。「あれは友達の話ですよ。女学校へ行つてゐる妹が、裁縫がとても嫌ひなんだつて。」云ひすてるなり、五作は便所へ行つて、なかなか出て来なかつた。

13

或日、二人の友人がやつて来て、五作と一緒に床の間の書物を、片端から箱につめた。

額の高く禿げあがつた、眼差の冷徹な、或るロシア人の大きな寫眞肖像を、五作は壁からはがして、丁寧に巻いた。デスクの抽斗から、或は本箱のうしろや、長押まで捜してひきずりだした、あらゆる紙片、手紙の殻、一切を庭に積んで、ひきさき、火をつけた。

母は縁側にうづくまつて、五作達が一つ一つ紙片をひろげては熱心に話合ひながら、そいつを細かくひきさいて火に燻べる有様を、ぼんやり眺めてゐた。雑司ヶ谷から白金の學院までは遠すぎるので、學校の近くに友人達と合宿をして、うんと勉強したいと、五作は云ひだしたのだ。北海道の父の許もうけた。三吉も干渉はしなかつた。いよいよ今日が引越だつた。

自分の子供と呼び得るのは、今は五作一人だ。その五作までが、たうとう母の家から巢立つて行かうとしてゐるのだ。

引越の荷車にデスクや本箱、椅子なんかを積みこむ五作の、まるで解放された喜びで有頂天になつてゐるやうな元氣のいい快活な掛聲や動作のどこに、寂しくあとに残る母の心をせめて考へても見ようとする氣配がうかがはれよう！

五作達が出て行つたあと、がらんとした床の間の前を、母は何と云ふことなくうろろと歩きまはつた。デスクの脚の跡が四つ、畳にまるくついてゐるのを見つけると、貴重な拾物でもしたやうに、彼女は光澤のない眼をみはつた。五作の残して行つたのは、その四つの跡でしかなかつた。

14

北海道から濕地茸がとどくと、間もなく父病氣の報が来た。

脚も弱く、氣も弱く、長旅をいやがる母も、旅立たないわけにはいかなかつた。三吉、四郎、五作、宏。残つたのはえい子きりだ。四郎は一時失職しようとも、家計は三吉から補助をすると云ふ條件で、行くことにした。ただし蒲田の家は一旦たたみ、雑司ヶ谷の方へ妻子を同居させて、えい子と留守居をする事になつた。

病氣がながびきさうなので、三吉と五作は一先づ歸京した。が、一ヶ月後には危篤の電報が来た。三吉と五作はまた行つて、葬式を済まして、今度はみんな一緒に、父の遺骨を持つて歸つて来た。

母はめつきり老衰した。年が暮れ、一月になつて、床についてゐる日が多かつた。四郎の家内が、今では母にかはつて炊事その他にたづさはつた。櫻時になると、陽氣の暖かさに少しは元氣も出たらしく、矢來の三吉の家へ、そのうち行かうなどと云へるやうにもなつた。

それまで月に二三度は、かならず來てゐた五作が、まるきり顔を見せなくなつた。「修學旅行に行つたんださうだよ。」

四郎は云ふのだが、母には信ぜられなかつた。三月から四月にかけて、學校は年度がはりではないか。修學旅行なんかある筈はなかつた。

明るい陽射の庭に、櫻の花がしきりと散る日だつた。庭の木戸から、五作がのつそりとはひつて來た、縁側で日向ぼつこしてゐた母は、あぶなく聲をたてるどころだつた。

西洋乞食とも見まがふやうな、五作の姿だつた。鏝のたれた茶色のソフトをすつぽりかぶつて、その下から狂氣じみた鋭い眼で、ぐつと母を見据ゑた。顔色は蒼白く、口髭鬚はのび放題、襟元には髪の毛が蓬蓬とかぶさつてゐた。

外套のポケットは破れ、裾はちぎれてゐた。ズボンの裾も縦に裂けてゐた。

ものも云はずに、彼は縁側にあがつた。外套を脱ぎ、上着を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、襯衣を脱ぎ、猿股

ひとつの裸體になつた。二の腕には青痣のやうな傷痕があつた。両方の膝頭は黒血の瘡蓋だらけだつた。足首には輪型に、皮膚が擦りむけて血の滲んだ跡がついてゐた。

三日前解禁になつた、共産黨事件の新聞記事を、咄嗟に母は思ひだした。ちりけもとに寒けがして、胴震ひがやまなかつた。疑つてゐたことが、はたして事實だつたのだ。口端が痺れてものも云へなかつた。

五作は押入れから着物を捜して着ると、帯がはりにバンドを締めて、玄關へ行つた。母は立つた。膝の骨がぼきりと音がした。跛をひきひき、息をきつて五作を追ひかけた。

「五作！ どこへ行く！」

表の戸をあけかけた手をそのまま、五作はふりかへつて、冷酷な眼にちつと母を見かへした。

「風呂へ行くんだ！」

五作の背後に、表戸は烈しい音で締められた。

母は震へながら式臺に立つてゐた。いつまで待つても門の戸の開く音がしなかつた。跣足で降りて、戸の隙間からのぞいて見た。門の前で、五作は齒ぎしりして、両手に頭髪を掻きむしりながら悶えてゐた。が、ぢきに手の甲で眼を拭くと、門を出て行つた。

深い溜息を洩らして、母は縁側に戻つた。メリヤスの襯衣は、襟垢で黒くなつてゐた。何心なくとつて見ると、虱らしいものが、毛の間にうごめてゐた。あわてて老眼鏡をかけて、細密に檢べた。縫目

縫目に、大風小虱の列だつた。どれも赤ぶくれにふとつてゐた。
 「こいつめ！ こいつめ！」
 罵りながら、彼女は一度一度齒噛みしては、両方の親指の爪で潰して行つた。五作のかたきでも打つやうに。

15

見馴れない、背廣服の男が、或日訪ねて来た。

「お宅に岡野五作さんと云ふ方がゐますね？」

玄關の間に母は腰を浮かしたり、かしこまつたり、おどおどと落着なく口籠もつた。

「はい、をりますですが、あの、……」

「ちよつと會ひたいんですが、……」

かう云つて男は式臺に腰をかけて、ポケットからバツトの箱をとりだした。

「學校へまゐつてをりますので。」

男はぢろりと母を睨めつけた。が、すぐにさりげなささうに向きなほつて、巻煙草を吸ひつけた。

「山本還二と云ふのが、よく来るだらう？」

男の態度や言葉は、一遍にかはつた。

「學校へ行つたなんて、嘘を云つても駄目だぞ！ 二階にゐるだらう？ 山本が來てゐることは解つてゐる。」

氣つかれないやうに男は靴を脱ぐと、さつと母の前を掠めて、梯子段をのぼつて行つた。

母は、べしやんこに腰を落して、肩で息をついた。眼先が暗く、眩暈がして、今にも昏倒しさうだつた。

争論がはじまるか、亂闘が起るか！

豫期に反して、その男ひとり、足音荒く梯子段を降りて來た。

「山本還二が來たら、すぐにそつと交番へ知らせに來るんだぞ！ いいか！」

脅迫的に云ひ残して男は出て行つた。

膝が震へて、母は立つことも難澁だつた。四つん這ひになつて、やうやう梯子段をのぼつた。朝から

誰もゐなかつたかのやうに、部屋はからつぽで、ちやんと整理されてゐた。

裏側の腰高窓から身を乗りだして、母はうろろろ見まはした。

板壁の蔭から、五作の顔がのぞいた。

「歸つた？」

母はまだ恐怖に囚はれてゐた。手で抑へつけるやうに制して、表側の縁側へ行つて見た。扉外の通に

は人影もなかつた。

腰高窓に戻つて、母は五作の名を小聲に呼んだ。

下の窓の小屋根を足がかりにして、五作は攀のぼつて來た。つづいて山本還二も。

「びつくりしたでせう？」

山本は、よく澄んだ眼に笑皺をよせて、五作の母をいたはつた。人相をかへるため、急に大人びた口髭を蓄へた彼の蒼白い顔には、笑つても凄味があつた。

「今夜一先づ、僕は田舎へ行くことにする。これだ！」

彼は小さな風呂敷包を五作に渡した。五作は押入をあけて、上の棚にあがつた。天井板をはがして、その包を隠匿した。

その夜五作は、山本還二と一緒に出たきり、一週間歸宅しなかつた。

16

「お母さんは入院したよ。」

一週間目の夕方、五作が歸つて來ると、姉のえい子が玄關に出て來て、叱責の語氣で云つた。病院へ行くと、母は視力の衰へた眼で五作の顔をまぢまぢと見あげた。

「五作か！」

云ふと母は、五作の手首を片手でぎゅつと掴んだ。掴みながら彼女は、枕からじりじりと頭を擡げた。病人とは思へないほどの、強い握力だつた。五作は握られた方の手を開かうとして見た。自分で自分の指をまつすぐにのぼすことは出来なかつた。

そのうち母は、ぐつたりと眼を瞑つて枕に頭をおとした。が、五作の手は放さなかつた。

母の手の力が次第に緩むのを見て、五作はそつと抜きとらうとした。その瞬間、反射的に、母の手に力が加はつた。彼女は眼の裂けるほどに五作を睨んだ。

「もうどこへもやらない！」

枕の上で彼女は神経的に首を振りつづけた。

「どこまでも、一緒に連れて行くよ！ お前だけは、死んでも放すもんか！」

母がこの世に残した言葉は、それが最後だつた。間もなく彼女は、昏睡状態に陥つた。永久に眼覚めない昏睡だつた。

翌日の深夜、えい子、三吉、四郎、五作、宏、みんな病床をかこんで、刻刻危機にせまる母の苦澁な顔を見まもつた。

「ゆうべ僕の手首を掴んでね、死んでも放すもんかつて云つたんですよ。」
 五作は三吉の耳に囁いた。
 三吉は不快に顔をしかめて、窓際に去つた。母の執念が薄気味悪く感ぜられると同時に、結局はひとりで死んで行く人間の惨ましい姿がまざまざと彼の眼に映じた。
 黒黒と病室の玻璃窓を蔽ふ葉櫻の葉の隙間に、星が一つ見えた。三吉はいつまでも熱心に、その星を見つめてゐた。

—了—



定 價 五 拾 錢
 郵 送 料 六 錢

道 彈 の 質 物

昭和五年四月一日印刷
 昭和五年四月七日發行

著 者 岡 田 三 郎

發 行 者 佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町

發 行 所 新 潮 社

電話牛込
 長
 八八八八八
 〇〇〇〇〇
 九八七六五
 番番番番番
 振替東京
 一七四二番

東京小石川區江西戶川町 富士印刷株式會社印刷

新興藝術派叢書

■ 黒い地帯

黒い地帯○獵奇の街○鷺鳥○汽笛○都會の觸手○或る浮浪者○土龍○郷愁○自殺を奨める話○熊の出る開墾地○骸首

佐左木俊郎

■ 街のナンセンス

藝術を街頭へ○創作五篇○コント五篇○小品五篇○通俗小説五篇

龍膽寺雄

■ 聯想の暴風

月で鶏が釣れたら○薔薇の花のついた寝臺○北京の頃の娘○ザンバ○ある轉形期の勞働者○李大石○青龍旗(以下五篇)

久野豊彦

■ 僕の標本室

叩く子○踊子旅風俗○盲目と少女○土族○笑はぬ男○顯微鏡怪談(以下三十八篇)

川端康成

■ 神聖な裸婦

明日へ遊ぶ○襟・竹の花○神聖な裸婦○十七歳の感情○上層の風○白い水族館○ヅロオスを穿忘れたお嬢さん(以下九篇)

猶崎勤

■ 高架線

高架線○鳥○笑つた皇后○靜かなる羅列○負けた良人○古い筆○恐ろしき花

横光利一

■ 崖の下

業苦○崖の下○生別離○足相撲○曇り日○フヂ○一日○父となる日○あかご○牡丹雪○不幸な夫婦○戀文○父の手紙

嘉村礪多

■ 夜ふけと梅の花

朽助のゐる谷間○炭鑛地帯病院○山椒魚○ジョセフと女子大學生○埋憂記○休憩時間○鯉○夜ふけと梅の花(以下八篇)

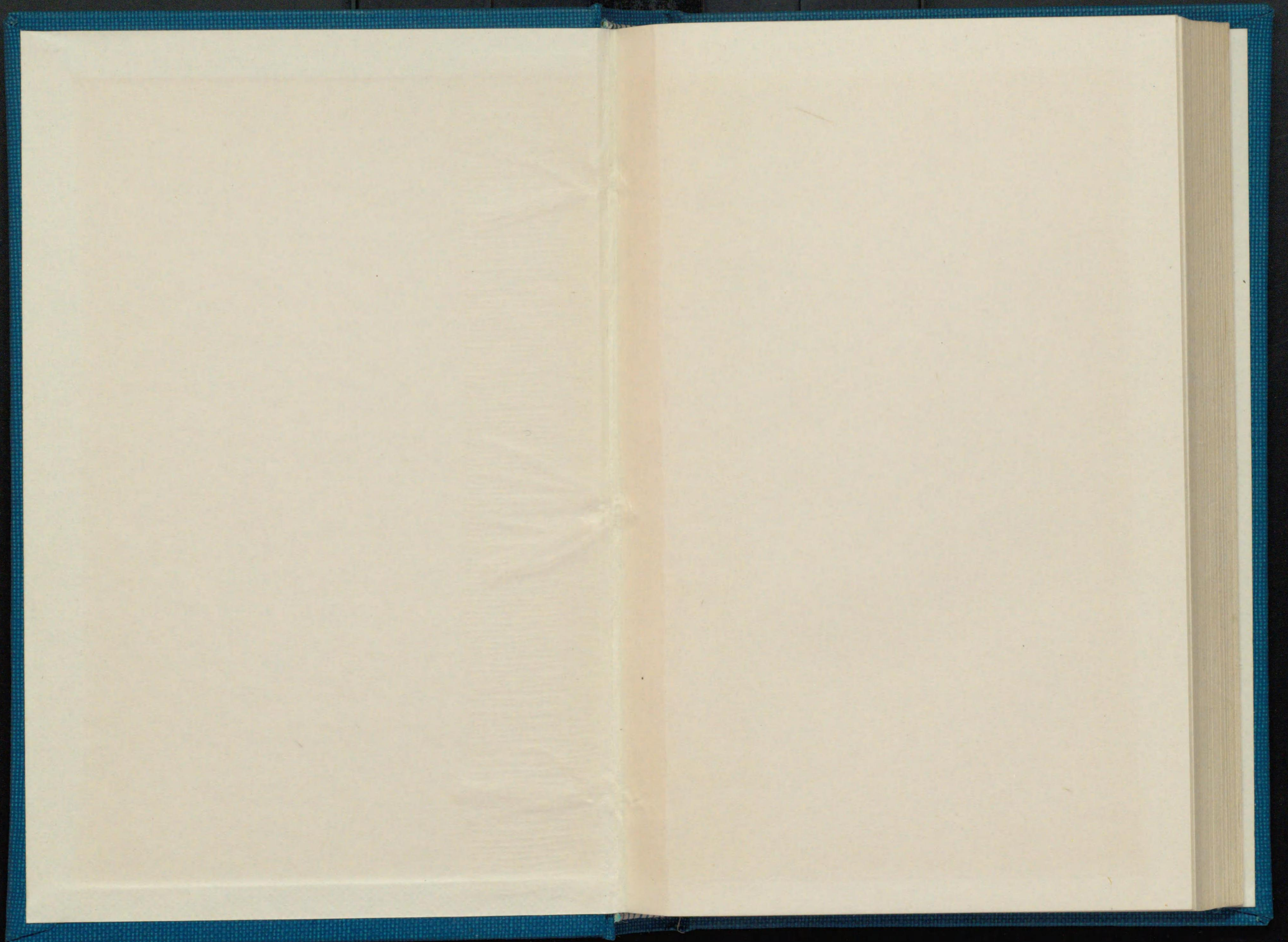
井伏鱒二

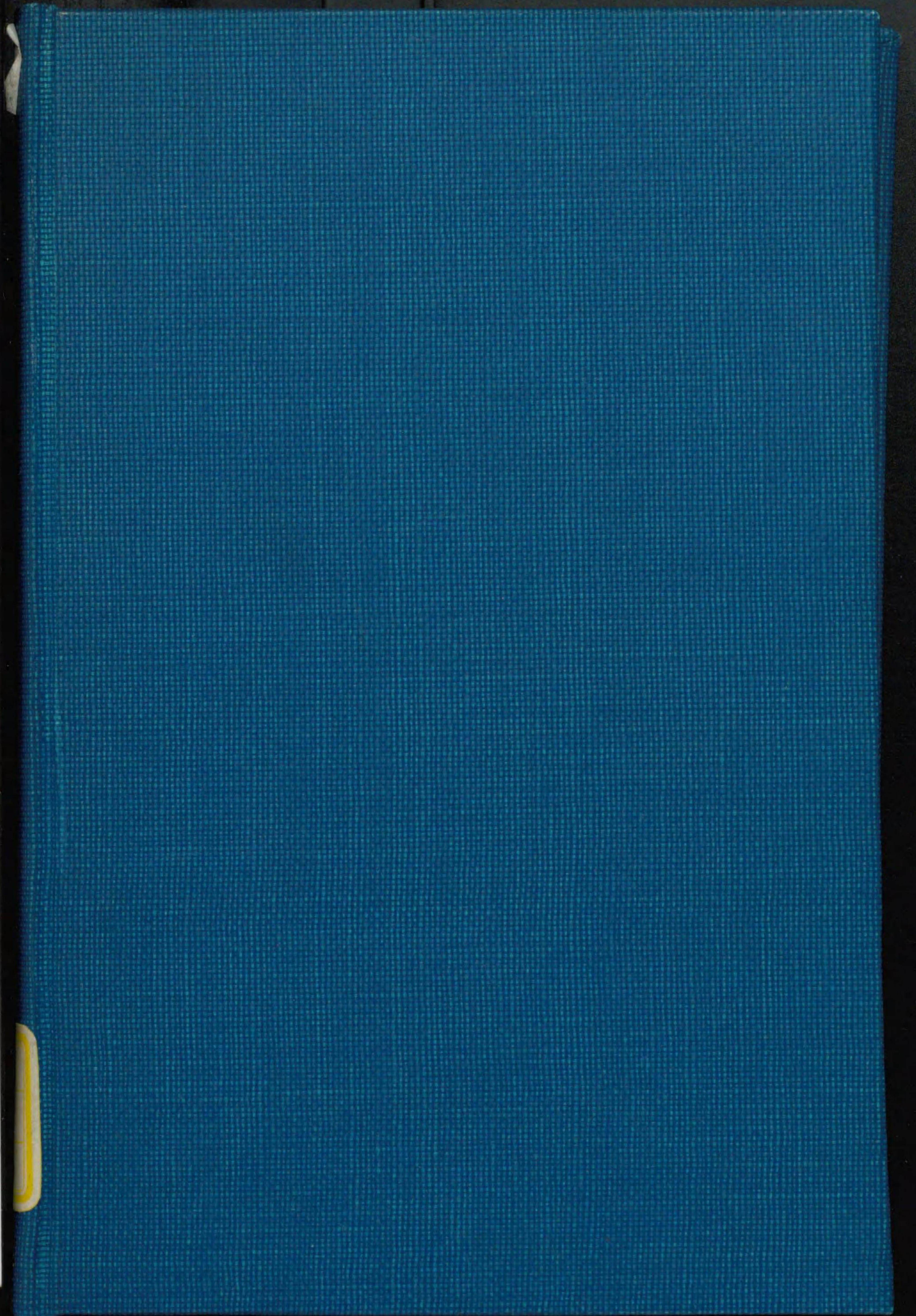
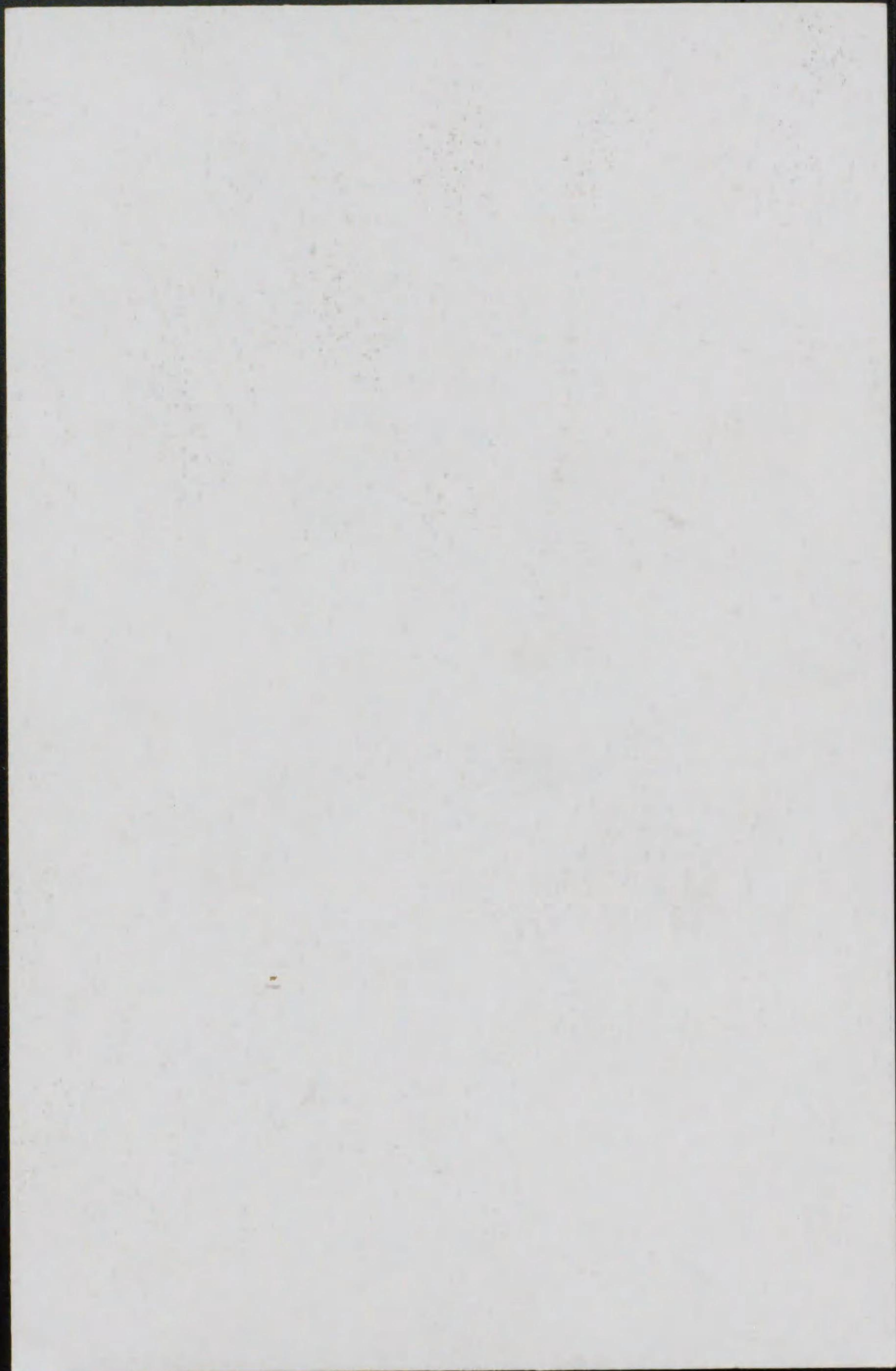
■ 女群行進

女群行進○風船玉とスプリングコート○女の不整形感情○重役Tの感傷○四年間○彼女の分裂○青きドナウ○風船(以下六篇)

淺原六朗

2556



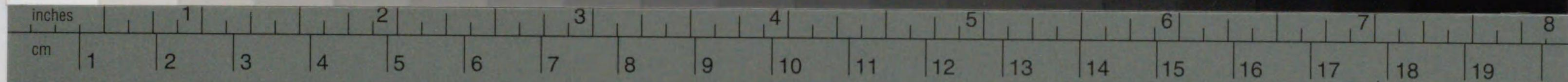


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

